
破壊する力

バロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊する力

【Nコード】

N3312H

【作者名】

バロン

【あらすじ】

裏歴史に存在する神の使徒、エクソシスト。現代における最強の魔術師、さくら。混じることのない両者が、「タイム」によって混じる、「カードキャプターさくら」と「D・Gray-man」の壮絶ファンタジー。

過去と現代

19世紀末の影の一部に、黒の教団はあった。

既に大廃空虚となるべきを、今なお、その姿を残している。

そこは暗く、闇に吞まれていたが、凜としたその空気と建物の威圧的なたたずまいは見る人を魅了した。

しかし、19世紀末にそこで何が起こっていたのか知るものはいない。何故なら、それは闇に葬られた裏歴史だからだ。

一クロウカードー

何百年も昔、クロウ・リードという人が己の魔力で作った、言わば意思を持つカード。

選定者・ケルベロスが見定め、審判者・月^{ユエ}が決定した新たな主名をさくら。この世において最強の魔力を持つ者。

ある時、カードが封印されていた「封印の書」を解いてしまったために、さくらはカードキャプターとして、バラバラになったカードを、

ケルベロス・大道寺知世・李小狼と共に集める。後に、水月歌保・柊沢エリオル（クロウ・リード）の協力（？）を経て、クロウカード

を元にして、さくらが自分の魔力で「さくらカードー」を作る。

さくらと英国と裏歴史

「行ってきました。」

「行ってらっしゃい、気をつけてね。」

元気に玄関を飛び出していくのは、さくらという少女。兄、桃矢と一緒に空港に向かっていた。

「ねえ、お兄ちゃん、イギリスってどんなところかな？私、楽しみ〜（^^）／」

「さあな、オレも行ったことないから、わかんねえよ。」

今から二人は、柊沢エリオルからの招待を受け、イギリスに向かうとしていた。もちろん、さくらの親友の大道寺知世・李小狼・月城雪兎も

一緒である。桃矢は招待を受けていないが、あまりのシスコンぶりに妹のさくらが心配で着いてきたのである。えっ、なんで彼が招待を受けていないかって。それは、彼が普通の人間だから。知世も普通の人間だが、彼女は別格。後の二人はというと、小狼はさくらには劣るものの、魔力の持ち主で呪符を扱う。雪兎は、さくらを主とする月の仮の姿^{ユエ}なのだ。

13・00

ジャストのタイミングで、二人は待ち合わせ場所に着いた。そこには、先に来ていた二人、小狼と雪兎がいた。それを見たさくらは小走りで、二人のもとへとよって行った。

「お待たせ、小狼くん、雪兎さん。」

「いや、俺たちもさっき来たばかりだから。」

「ほえ？じゃあ、二人で一緒に来たの？」

さくらの疑問を解いたのは雪兎だった。

「うん。途中で李くんに会ってね、一緒に車に乗せてもらっちゃた

(＊＼＊)

「そうだったんだ。小狼くん、優しいね。」

そう言って、振り返ると、後ろでは火花が散っていた。小狼と桃矢だ。今にも取っ組み合いになりそうな二人を見ながら、雪兎は笑っていた。

「も、小狼くんもお兄ちゃんも、こんなとこでけんかしないでよ。」

さくらが呆れながら、二人に注意していると、どこからか声が聞こえてきた。それは聞く人を魅了するシャープでソプラノの声。さくらは、声の主が誰か、すぐに分かった。

「知世ちゃん！」

乱れた息を整えながら、知世は言った。

「お待たせしてしまって、すいません。ご迷惑をおかけしてしまつて。」

「ううん、全然。」

「おい、雪、そろそろ搭乗口に行かないと、間に合わないぞ。」

「えっ、あつ本当だ。じゃあ、行こうか。みんなそろつたし。」

「はい！！」

イギリス到着

「うわあ、イギリスって綺麗。あつ、小狼くん、あっちで一緒に写真撮ろう。知世ちゃんと雪兎と一緒に。お兄ちゃん、シャッター切つて。」

「っなんで、俺がつつ。」

「シャッターなら、僕がきりますよ。」

「ほえ？」

さくらたちの後ろから声をかけてきたのは、空港までさくらたちを向かえに来ていた、エリオルだった。

「お久しぶりですね、皆さん。元気でしたか？」

「うん！エリオルくんも久しぶり。奈久留さんや、スピネルさん、

水月先生も元気？」

「はい。みんな、あなたたちが来るのを、楽しみにしていたんですよ。」

「私もでよ。ねっ、知世ちゃん、小狼くん。」

「まあ、楽しみってわけじゃないけど。」

「私は楽しみですわ。特に、水月先生にお会いになれるのは。さくらちゃんのお兄さんもそう じゃないんですか？」

「俺は別に／＼／／／」

「桃矢、イギリスに行くって言ったとき、かなりうれしそうだったじゃない。あれって、水月 先生に会うの、楽しみにしてたんじゃないの？」

桃矢をからかいながら、笑っていた雪兎はかなり、楽しそうだった。

「おいつ、雪、よけいなこと言うな／＼／／」

「あはははっ！！！」

桃矢を除く全員で笑った後、一向は柊沢邸に向かう。そんな中、さくらのかばんの中で、何かが愚痴をこぼしたことは誰も知らなかった。それも、かなりの怒りの炎を燃やして。

「さくくくく。わいを忘れるやなんて、酷いわ。はよう、わいをここから出せ。」

エリオル邸のその、荘厳なたたずまいに、みんなぼか／＼んとしていた。そんななか、最初に口を開いたのはさくらだった。

「ほえ、エリオルくんのお家ってすごいね。なんか、映画にできそうな感じがする。」

「そんなことはありませんよ。僕は、大道寺さんの家のほうが、ご立派だと思いますよ。」

「まあ、それは、褒めて頂いてるんですか？」

「ええ、もちろん（^^）」

いっせいに、みんな同じことを思った。

(いい勝負だと思うけどな)

玄関を開け、中に入ると・・・

「桃矢くっくん!!」

「うおっ。」

思いつき桃矢に抱きついてきたのは、秋月奈久留だった。彼女は、エリオルが作った、なんというか、月に近い存在。本来の名は、ルビームーン。今は、秋月奈久留として、イギリスの学校に通っている。桃矢に一途な女の子。

「おいっ、秋月。離れろ。」

「だってえ、桃矢くん、私が引越してから何の連絡もしてくれないだもん。私は、毎日メールしてるのに。」

「誰が連絡してくれなんていったよ。頼んだ覚えないぞ。」

「ひっどい、聞いたさくらちゃん。こんなに可愛い女の子が、積極的にアプローチしてるのに、無視ってひどいよね。」

「ほええ。」

困惑しているさくらをよそに、知世はカメラを片手に奈久留と桃矢のやり取りを、他人事の ように笑いながら、撮っていた。

みんなが勝手気ままに騒いでるなか、小狼はエリオルに聞いていた。

「おい、そろそろ今回俺たちを読んだ訳を話してくれてもいいんじゃないのか。」

「やはり、李くんは気づいていましたか。さすが、鋭いですね。」

「なんとなくな。俺たちだけだったらわかるけど、雪兎も呼んだってことは月に用があるんだろ。」

「ふふ、キミを敵に回したらかなり、厄介な相手でしょうね。分かりました。お話します。さくらさんと大道寺さんと呼んで、4人だけで話しましょう。」

「桜さん、大道寺さん、ちょっといいですか。お話したいことがあります。月城さんとさくらさんのお兄さんは、ルビーから聞いてください。」

そう言って、エリオルは皆に背を向けて、廊下に歩いていった。
さくら・小狼・知世も後に続いた。ホールに残っていた3人も奈久留の部屋に案内された。

エリオルの部屋には、以前クロウが使っていた椅子があった。エリオルがそれに座ると、さくらたちもそれぞれソファに座った。落ち着いた雰囲気の中、エリオルが口を開いた。

「まず何からはなせばいいのやら。そうだ、一つ伺いたいのですが、ケルベロスはどうしたんですか？」

エリオルの問いかけに、さくらは一瞬頭の上に「？」を浮かべ・・・、

「あゝつつつ、ケロちゃんのこと忘れてた。」

思い出したように自分のかばんの中をあさりだすさくら。その様子を、羽の生えた黒猫が一匹見ていた。そして・・・。

「くおらゝ、さくらゝ、わいを殺す気か。いつまでも、いつまでもかばんの中に閉じ込めよって、暑いし窮屈やし最悪やわ。」

「ごめん、ケロちゃん。」

「つたく、クロウもクロウや。気づいてたんやったら、早く言わんかい。」

「すみません。自分でいつか出てくると思ってたんですけど。中々出てこないで、ちょっと。」

「まあ、日ごろの行いのせいじゃないのか。」

皮肉が混じった声で、小狼が言う。それに怒るケルベロス。

「なんやと、こらあ。もういっぺん言うてみい。小僧。」

「なっ、誰が小僧だ。」

「お前みたいなん、小僧で十分じゃ。」

このお決まり。お約束パターンの会話はとてつもない。そこで、ここぞと言わんばかりの Goodタイミングで知世が言った。

「ケロちゃん、そんなに怒らないでください。後で美味しいお菓子を差し上げますから。」

「お菓子」その言葉は、絶大の効果を生む。

「ほんまか、知世。」

「ええ。」

「よっしゃー！！で、何の話やったん？」

元はと言えば、自分が話しの腰を折ってしまったのに、なんとまあ、偉そうな態度。さくら はちよつと呆れていた。

「エリオルくん、それで話って？」

さくらが言うと、皆本来の目的を思い出した。

「そうですわ。どうぞ、お話になられてください。エリオルくん。」

「そうだ。早く話せ。」

3人がせかすので、エリオルは頭をひねり、どこから話そうか考えた。そして思いついたの か、顔を上げ、3人に聞いた。

「皆さん、ノアの方舟はご存知ですか。」

「それって確か、人類の創世記のお話でしたわね。ですが、ずいぶん前のお話です。私たちを およびしたことで、どういふご関係が？」

小狼は「確かに」という風に、軽く頷いた。さくらはノアの方舟のこと自体が分かっていない様子だった。

「はい。ではまず、ノアの方舟の話からしますね。」

ーノアの方舟ー

旧約聖書 開卷第一の書

創世記 6章から8章

神が悪に満ちた世界を絶滅しようとして、洪水を起こした時、ノアという人間がこれに乗る ことを許され、難を逃れた。

方舟はアラト山に漂着し、ノアはそこで神から新しい契約を授かり、アダムに継ぐ人類の 第二の祖先となった・・・とされている。表の歴史では。

「表の歴史？」

「どういうことでしょうか？」

「表って言うことは、もしかして、裏の歴史もあるってことか。柊沢。」

小狼がたずねると、不敵な笑みを浮かべ、エリオルはうなずく。

「その通りです。僕もこの話を聞いたときは、信じられませんでした。が、イギリスに古くから 続く家系、ブックマンの家系の人が言うことです。それから。それに、この話にはまだ、続きがあるんです。」

すべては二百年前。一つのキューブが発見されてから始まった。

そこに入っていたのは、古代文明からの予言とある物質の使用方法だった。

「ある物質？」

3人は首をかしげる。

そのキューブもそれだったんですけど、「神の結晶」と呼ばれる不思議な力を帯びた物質だ ったそうです。百年前の人たちは、それを「イノセンス」と呼んでいました。

「イノセンス？」

「ええ。百年前の人々は、そのイノセンスを「対アクマ武器」として使い、アクマを破壊して いたそうです。」

「ほっほええ、あつ悪魔。」

「まあ。」

「ちよつと待て。悪魔って言うのは、空想上の生き物だろ。実在するはずがない。」

「いえ。その悪魔ではありません。」

「???」

ーアクマー

それは「機械」と「悲劇」と「魂」を材料に造られる悪性兵器。人には誰しも心に「闇」がある。その「闇」が悲劇によって深くなった者のところへ、製造者はやってくる。そして、アクマを生む。

アクマはイノセンスと対等にある存在　ーダークマターによって造られたからだに、　「魂」を入れられ、誕生する。言わば、アクマは魂を内蔵された生きる兵器。

アクマになった魂は、製造者に支配され、罪に苦悩し、己の醜い姿に絶望し、現実を憎悪する。そんな魂のフラストレーションがアクマを進化　させるエネルギー源となる。　製造者の名前は、「千年伯爵」

沈黙の中、さくらは泣いていた。

「おい、大丈夫か、さくら。」

小狼が心配して、さくらをなだめる。知世は今の話に興味を持ったのか、目が少し輝いている。

「ねえ、エリオルくん。」

「なんですか？」

「そのアクマって、すごくかわいいそうなんだね。」

「！！」

「だって、その兵器さんたちはただ、大切な人を生き返らせようとしただけでしょう。それ　なのに、それを利用して悪いことをするなんて。かわいそうだよ。」

さくらは今の話で、アクマの悲しさを知り、それで泣いていたのだ。それは、この場にいる　誰も止められない。すると、小狼が話を元に戻した。

「なあ、さっきのノアの話とその・・・千年伯爵ってどう関係があるんだ？」

「私もそれがずっと、引っかかってるんですわ。エリオルくん。」

「はい。それが・・・。」

千年伯爵は、この世に災いを齎す者。「暗黒の3日間」が、再び千年伯爵とともに、やってくる。アクマと自身の家族、ノアの一族とともに。

「ノアの一族？」

3人は何それ？ 見たいな顔でエリオルを見るが、知世がハッとした。

「もしかして、それは、さきほどの話に出てきた、私たち人間の祖先の方々のことでしょう か？」

「ええ。彼らは人間離れした脅威の能力を有しており、千年伯爵とともに、この世を滅ぼすつもりなんです。」

世界をデスに導く。そのために、千年伯爵はイノセンスを破壊する。自分にとって最も邪魔な存在だから。

「しかし、そんな伯爵の野望を阻止しようと、百年前の人々は戦った。イノセンスを使って。イノセンスを使うことができるのは、神に選ばれた

使徒だけ。その人たちを、一エクソシストーと言います。」

「エクソシストって、アクマ狩りのことだよな。神の使徒って言ったけど、どういうことだよ。イノセンスが戦う人間を選ぶっていうのか。」

「はい。イノセンスに選ばれた人間のことを、一適合者ーと言って、イノセンスを対アクマ 武器として、伯爵と戦うのです。」
「そうなんだ。」

さくらは、さっきよりましたが、暗い顔をしていた。そこで小狼は聞いた。

「おい、柊沢。なんで俺たちにこの話をしたんだ。それを説明してくれ。」

「それはつつ、「はい、こんばんわー!!」
「!？」」

この場の空気に合わない声の主は、上空にいた。かぼちゃのかさをさした、ちよつとメタボ 気味の変な人が。

「はーい、わがはいの名は千年伯爵。この世をデスに変えるため、ただいま奮闘中ですよ。」

「千年伯爵？でも、あの方は、百年以上前の人ですわよね？どうして、この時代にいらっしゃるんですか？エリオルくん？」

「それは我輩が話してあげます。我輩は不死。どんな時代にも現れまゝす!!といっても、今のわたしは過去からきたんですけどね。それよりお前たち。我輩のことを何も知らずに、偉そうなことを言ってますね。一つ、おしおきなくては。何がいいですかね？」

考え込む伯爵は、パツと、いきなり明るくなった。

「そうだ。どうせならお前たちもアクマにして、我輩のコレクションになってもらいましょう。見たところ、お前たちは魔術がつかえる。それも強力な。」

そう言って、伯爵はかさを広げた。そして、どこからかカラフルなドアが出てきて、中に入る。そして、別れ際に、言う。

「過去で待っていますよう！エクソシストもろとも、振り返りにしてあげます。では、後ほど お会いしましょう（^^） Good luck!」

闇の中に行く、千年伯爵。その影を、4人は黙って見送ることしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3312h/>

破壊する力

2010年10月8日14時11分発行